

# 福竜丸だより



発行 第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

都立・第五福竜丸展示館ニュース

「げんしばくだんがおちると／ひるがよるになり／人はおぼけになる」  
(小学三年 坂本はつみ)  
印象的な朗読だと思った。  
六月二十一日、ビクターエンタテイメントから『第二楽章』というタイトルのCDが発売された。女優の吉永小百合が原爆詩を朗読したCD作品である。  
CDでは十二編の詩が朗読されている。峠三吉の「にんげんをかえせ」、林幸子の「ヒロシマの空」、栗原貞子の「生まれめんなかな」、大平(山田)数子の「慟哭」など、よく知られた作品もあるが、子どもたちの詩も四編取り上げられている。  
タイトルの『第二楽章』は、戦後五十年をこえ、これからはゆるやかに平和への願いを語り続けたいという思いで名づけたらしい。  
ほとんどは読んだことのある詩だったが、彼女の朗読は私の涙腺をゆるめ、新しい感動をあたえてくれた。  
つい声高に叫んでしまいたいような内容

## 「祈るように、粘り強く、語り続けたい」

鍋 島 聖 民

にのせて淡々と読み上げる静かな語り口が、かえって心にしみ入ってくるから不思議だ。「核兵器のない、平和な二十一世紀を願って、祈るような思いで朗読しました」と語る彼女の気持ちが伝わってくるように感じた。  
吉永小百合が原爆詩に関心を寄せるようになったのは、一九八六年二月十二日に東京・渋谷の山手教会で開かれた市民集会(日本被団協など十一団体が共催)で、詩の朗読を依頼されたのが直接のきっかけだといふ。  
以来、自ら原爆詩を集め、六百余編を読み込み、構想を練ってきた。BGMも自身で選曲した。当初は自主製作を覚悟していたほど、このCDには思い入れがあった。  
映画『愛と死の記録』(一九六六年)、早坂暁原作のドラマ『夢千代日記』(一九八一年)などの仕事をつうじて「核兵器が二度と使用されないように」と祈る気持ちが生まれました」と彼女は言う。そして彼女は、その気持ちを、の詩を、ときに軽快でさえあるBGM

実践をとおして表明してきた。ピキニ被災船の調査に取り組んだ高知の高校生の活動をはじめ、高校生の平和活動にはほとんどボランティアで協力しているのも、そのひとつだ。  
CDはマスコミでも取り上げられ反応は上々(八月十五日NHK衛生第二でも放送予定)だが、原水爆禁止運動の分野からも注目されている。  
たとえば、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)は今夏、まったく新しい写真パネル「原爆と人間展」(四〇枚セット)を製作し、各地で原爆展の開催を呼びかけているが、そのなかで、このCDが活用されることを期待している。  
第五福竜丸展示館でも、この「原爆と人間展」のパネルを展示し、吉永小百合のCDを聞く会を催してはいかがだうか。いや、ぜひご本人に来ていただき、第五福竜丸の前で原爆詩を読んでもらいたい。  
一人でも多くの人が、目と耳と心で被爆の実相をつかみ、核兵器のない、平和な二十一世紀をつくりたいという気持ちで、よりいっそう強めてほしい。CDを聞きながらそんなことを思った。  
(フリーランス編集者)

**核実験抗議の座込みも**  
六月、展示館には、74団体、一万六千名余の方々が訪れました。久保山愛吉記念碑を囲む夾竹桃も例年以上に早くからいっばいに咲き誇り、のうぜんかずらのオレンジの花も競うように花開いて来館者を迎えました。74団体中、学校団体は48、関東近県のほか滋賀、和歌山、兵庫、三重、愛知、岐阜、福井県等から32の中学校が修学旅行で訪れました。静岡市の南薬科小学校六年生45名は、焼津を訪ね乗組員の体験を聞き、映画「第五福竜丸」を見たりと学習を重ねて来館、いくつかの班に別れてテーマごと再学習しました。  
毎年八月、広島・長崎に高校生を派遣している東京港区から、教育委員会のよびかけで区内の十名の高校生が事前の研修として来館、船体内にも入り「死の灰」の恐怖を再確認しました。横田・福竜丸を結んだ反核平和の火の列の到着集会、アメリカの未臨界核実験に抗議する座込みも展示館前で開かれ、暑い夏を迎えました。  
**エンジン、「都民運動」始動**  
第五福竜丸のエンジンを船体に再会させ、原水爆のない未来へさらに力強い航海をさせようと、昨年十二月のエンジン引き揚げ以来、

和歌山県で進められてきた運動に呼応して、東京でも市民団体を中心に「都民運動」が始動をはじめました。運動発足のよびかけは、主婦連合会、東京地域婦人団体連盟、東京都原爆被害者団体協議会、東京都地域消費者団体連絡会、日本青年団協議会、東京都生活共同組合連合会の六団体。六月末開かれた会合で、①第五福竜丸の被爆後の軌跡をたどり、船体とエンジンの夢の島での再会とその保存を実現する②エンジンの保存を機に第五福竜丸展示館の建て替えなどの具体的な対応を東京都に求めていくなど、四つの運動目標を定め、被爆の実態についての理解と宣伝を行ないつつ、東京都平和の日の取り組みと運動し、対都甲入れや、都知事折衝を行なうことを決定。七月十八日、幅広い団体を結集した「よびかけ団体会議」が開かれます。  
**「北の星」号マーシャルへ**  
旧ロンゲラップ島民に船を贈ろうと進められてきた「ブンブン・プロジェクト」がいよいよ第一号船を送ることにになりました。船名も「リマンマン号」(北の星)「六六トン。すでに改造・機装も行なわれ、七月二十六日横浜港から貨物船に乗せ、マジュロに向かいます。



写真展の説明を聞く高校生

**『地球被曝』の 写真展終わる**  
展示館で約一ヵ月開かれてきた豊崎博光写真展「ATOMIC AGE 地球被曝——はじまりの半世紀」は、反響をよびつつ六月二十二日終了、会場のノートにはこんな感想が記されました。  
◇：今も汚染され続けている大地と人々に対してわたしたちのデキルコトは？ 第五福竜丸の記録を含めて、ムネのつまる勇氣ある記録、写真展だとオモイマス。  
◇：写真は淡々と訴えてくるのとまどいます。私たちが毎日くらししているとき、きづかないごこの生活、現実が目の前にあらわれます。戦争反対や原発反対といった拒絶ですむ問題ではないと気付かされます。今ここにある現実を知り、うけとめる力を。忘れてはならない過去があり、今私たちは歴史のなかに生きています。  
◇：今まであんまり原爆について考えたことがなかったから写真を見てオドロきました。もう二度とおこってほしくないことだと思いました。  
◇：たった一回の被爆なのに、被害を受ける人はたくさんいます。家族一人でも被爆者になったら家族全体が被害者になるのではないかと思います。たとえ戦争が終わったとしても、人間に及んだ被害が消えることはありません。核兵器は絶対に必要ないと痛感しました。  
◇：頭が二つある牛がいるなんてびっくりしました。  
◇：核についての言説が消えていくなかで、もういちど、我々にとつて核とは何だったのか、答えを出そうとするのではなく、その問いを深めることが必要だろうと思った。アトミック・レイシズムの犠牲者は常にリアルタイムで報道されないだけに、忘れていたくない問題だと思ふ。

### 暑熱のマーシャル諸島を訪ねて

聞問 元

去る六月、盛夏のマーシャル諸島共和国へ核実験被害者調査団の一員として出かけてきました。私なりに印象的、衝撃的であったことを述べてみたいと思います。

マーシャル全体が汚染されていた近年、アメリカ原子力委員会(AEC)の極秘文書のいくつかが公開され、マーシャル諸島での核実験に関する重要な事実が明らかになってきています。

福竜丸が被ばくしたブラボー水爆実験を含むキャッスル作戦での汚染環境、死の灰をうけた島民が存在した環礁が従来から四島(ロングラップ、ウトリック、ロンゲリック、アイリングナエ)と限定されていたことに疑問がありました。今、今回現地の関係者から提供された資料で、マーシャル全体が汚染されていたことがはっきりしました。

今、マーシャルでは、被ばく者の病気に対する補償は全環礁を対象に行われています。つまり、従

来汚染されて住めないと言われたエニウエトク、ビキニ、ロンゲラップ、ウトリック以外の島民でも、指定されているがんや白血病などの三十四の病気に罹ったことが証明されれば、わずかも補償をうけられることになりそうです。昨年の十二月現在で実に一三六八人が対象となっています。

ただし、米エネルギー省のもとで行われた五六年、五八年の一連の実験データは、また公開されていません。これが公開されれば、更に汚染の実態が明らかになることでしょう。

島民はアメリカをどうみているか  
ロンゲラップの元村長のジョン・アンジャインさんは七十五才になりますが元気でした。三・一で被ばくしたロンゲラップ島民八十六名のうち、すでに三十六人が亡くなりました。死没者の家族には一人当り三ヶ月毎に二五〇ドルが支払われています。

長男レコジを白血病で亡くした

ジョンさんもそれで細々と生活しています。

アメリカは最初から島民をモットとして扱ったのだと証言したジョンさんも、ロンゲラップに生きて戻れることはできないかもしれないと淋しい表情を見せています。

八十六人の直接の被ばく者の検診は今でも米エネルギー省(DOE)が行なっています。もともと今は残りの五〇人を見ているのですが、この中で一人DOEの検診をうけていない人がいました。ジェバン・リクロンさんは、DOEの検査は十五年うけていません。彼が、自分の子供の心臓が悪いので何とかしてほしいと医者に訴えたところ「あなたは患者だが、子供は違う」といつてとりあってくれなかったといっています。それ以来彼はDOEの検診は受けていません。

マーシャル島民の被害は単に放射能による人体被害にとどまらない

ロンゲラップの島民とその家族は、クワジェリン環礁のイバイ島とメジャット島に大多数が住んでいます。ロンゲラップ島を棄て、グリーンピースの船で移り住んだメジャット島は今でも電気はありません。病院のある島、イバイまで

高速のボートで四時間かかります。イバイはかつてはココナツの生い茂った普通の島だったので、米軍基地化のため他の島を追い出された人たちが人口が急増え、劣悪な生活環境となつています。ジョンさん、ネルソンさんなどアンジャイン家の大部分はイバイで暮らしていますが、今のままでは明日に希望は持てないのです。子供たちのためにも、きれいなロンゲラップに帰りたいのですが、まだ放射能汚染があつてだめなのです。人々はアメリカからのわずかな補償金をたよりに生活をしていません。働く場所も基地以外になく、就労人口の二割程度しか仕事がないのです。若者はほとんど失業しています。

先祖伝来の平和な島を奪われ、水も食糧の確保もままならない、他人の島での不自由な生活を強いられています。病気の補償も資金が底を尽きはじめ、年々減額されているのが実態です。

その生活を支える補償協定も、二〇〇一年に期限切れを迎えようとしているのです。

島民の平和な暮らしを奪ったアメリカの責任は大きい、限りなく大きいというのが私の実感です。(医師全日本民医連被爆問題委員会)



「死の灰」を前にして

六月二十二日、第五福竜丸展示館をはじめ訪ねた。

福竜丸の後尾がまず目に入った。意外に大きい。建物の中にあるせいかもしれない。

「この船体が何を訴えているか」説明を聞きながら、展示資料を順次みる。少し緊張して落ち着かない。

ガラスケースの中に「死の灰」をとじ込めた壺が三つ並んでいた。端の二つは船体から採取したものである。鉄のサビのような色で不気味である。真ん中の壺には純白の粉末がつまっていた。横の二つと比べるとむしろ綺麗に見える。

### うけとめた「死の灰」の恐怖 小松 譲

これが福竜丸乗組員の持ち帰ったものという。

「これがあの『死の灰』か」と一瞬ビクッとしました。

「放射線を出していますが人体への影響はありません」との説明を聞いたが、あの時の恐怖が記憶の底から蘇ってきた。

あの時(一九五四年三月)私は沖繩の中学一年生だった。沖繩でも、雨に濡れたら髪の毛が抜けるよ!と言われ非常な恐怖に襲われたものだ。

「死の灰」は、文字どおり恐怖である。

福竜丸の乗組員二十三人の方はそれを何時間も浴びて被曝したのだ。あの時の乗組員のみなさんはどんな思いだったのか。

ご好意で福竜丸にあがらせてもらった。甲板に居ると何だか揺れているようだ。下からみると大きくみえた船体も、こうして甲板からみると案外小さい。こんな小さい船で太平洋の荒海で漁をしていたのかと思う。

魚槽や延縄、カイコ棚の船室、炊事をしたカマド、煙突などみていると「死の灰」に襲われたあの

時の乗組員たちの様子がうかんでくる。逃げ出すためには投縄した延縄を引き揚げなければならなかった。五時間余を要したという。その間の乗組員の恐怖は如何ほどだったことだろう。そんななかでも久保山愛吉さんは、冷静な判断をされた。被曝したことを送信しないで、全速力で脱出したという。

「もし送信していたら...」第五福竜丸は焼津港に帰れなかったのではない。いろいろなことが頭の中をよぎる。

この「第五福竜丸見学会」は、私達「医師の会」が企画、会員・家族等十三人が参加して行われた。

「医師の会」(一九八九年六月結成)は、和歌山県下約二千人の医師・歯科医師に呼びかけて、二百人の会員でスタートした。活動はまず被爆者との懇談から始まった。被爆の実相を掴むことに努めた。また「原点から学ぼう」と、広島訪問旅行を十一人で行った(九二年二月)。米田美津子さんに原爆投下の時のこと被爆の苦しみをつぶさにお聞きした。米田さんは「私は生かされたのだ」と話された。昨年は長崎訪問旅行を企画(十五人参加)。山田拓民さんの被爆体験をうかがった。山田さんの家族は次々と亡くなられ、一番ひ

どい大やけどのお父さんが最後に(三十五年後)亡くなられたとのことであった。昨年の総会では、山口仙二さんをお招きして「あの日の長崎」と題して講演会を開き多くの参加者を得た。第七回総会(一九九五年)では、ロンゲラップ環礁の住民の被災調査をされた竹内理恵医師の報告を聞き、ビキニ水爆実験の恐ろしさ、今だに苦しむ島の人たちの生活を知ることができた。

第九回総会が今年七月十二日に開かれる。大石又七さんをお招きし平和講演会を開く。大石さんに「ビキニ水爆被爆者として生きる」と題してお話して頂くことにしている。

私達は、原爆の被爆者の苦しみをもっともっと知らねばならない。水爆実験の被災の実態もまだまだ調査がすすんでいないという。第五福竜丸は和歌山で建造され、私達と縁の深い船だが、和歌山の漁船もかなりの数被災しているとのことだ。その調査は県民自身が行わねばならない。このようなことを考えながら展示館を辞した。

折しもアメリカが未臨界核実験を行ったというニュースが入ってきた。核兵器の開発はとどまるところを知らない。強い憤りを感じる。(核戦争防止新和歌山県医師の会)